

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌 名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	18 / 2005 / 15-18
タイトル	ふるさと雪形探訪 I 白神岳の山名は雪型に由来
著 者 名	室谷洋司

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

《 ふるさと雪形探訪 1 》

白神岳の山名は雪形に由来

第10代 室谷洋司



図1 青森、秋田県を巡って数々の紀行日記を残した菅江真澄(1754~1829)

白神岳の山名は雪形に由来。— 今から二百年前の文化4年に書かれた菅江真澄の日記をもとに、その検証を行った。

白神周辺は世界自然遺産に登録されてからにわかに慌しくなった。かつて弘前の人々には「目屋の山」で済まされていたのが、今はそうはいかない。

山名由来も諸説が入り乱れる。

奈良時代の「日本書紀」にある「日高見国の岳」の発音が変わって、ヒタカミノダケからシラ

カミダケになった(根深、2000)とか、あるいはアイヌ語の岩(シラー)と神(カムイ)から「シラー、カムイ」と呼ばれ、のちに倭人が「白神」としたのではないかという推測(平田、2004)などなど。

これから検証のカギになる「雪形」とは、雪国の高山に深く降り積もった雪が消えるにしたがって現れる残雪の形状のこと。土地の人はこれを見ながら農事とか漁の目安とした。暦などがなかった時代に、その土地土地に固有の雪形は「おらが山の季節のメッセージ」で、生業の良し悪しを左右する大切なものであった。日本全国には約三百余りの雪形が確認されていて、なかには山名由来になっているものも少なくない。長野県の白馬岳は早春に雪形「代掻き馬(しろかきうま)」が現れることによる。

菅江真澄の日記で検証

江戸時代に、青森県や秋田県の各所をめぐり数々の日記を残した菅江真澄(図1)は、文化4年(1807)の春、秋田県北部の村々や名所旧跡を訪ね歩いていた。赤紫のカタクリの花が咲き乱れ、山里の木々はふっくらと芽吹き、遠くには真っ白な高い山が顔をのぞかせていた。真澄は見晴らしの良い高台に立った。

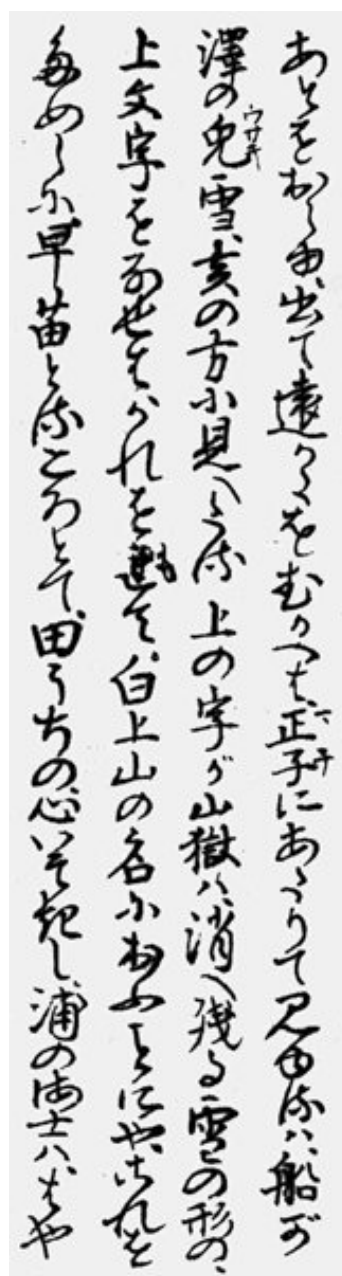


図2 日記「おがらの滝」にある雪形の記述

「遠くを望むと、正子〔真北〕に当たって見えるのは船が澤の兎雪、亥〔北北西〕に見える上の字が山嶽は消え残る雪の形の上文字をしているところから白上山と呼ばれる。これを目安として早苗をとるところになったとして、心せわしく田うちをするのである。浦の漁師は、もう鰯〔いわし〕のくるところだと、漁の準備をするのである。」
(図 2、「おがらの滝」から。〔 〕内は筆者注)

— この数行に雪形に関する記述を見つけて小躍りした。「上」という漢字の雪形が発見できれば、白神岳の極めて具体的な山名由来の解明となる。

長年、雪形の調査をしてきて、その確認作業は試行錯誤の連続であった。まずその雪形を望見できる場所はどこなのか、季節はいつか。山褰(ひだ)が織り成す残雪模様は千差万別だし、雪の消え方も年によって違う。秋田県北部の場合、白神岳はどこから見えるのか、専門家に地形図のデータからシミュレーション(図 3)をお願いし、位置関係に誤りのないようにした。

つぎに日記の記述と地図を見比べながら調査のルートづくりをした。その

結果、場所は秋田県山本郡の峰浜と分かった。役場に勤め菅江真澄に詳しい嶋津宣美さんに案内をしてもらうことにした。2002 年 4 月から調査に入った。与えられた期間は 1 か月しかない。失敗すれば来年に持ち越した。

白神山地は青森県でも秋田県でも、全体が見渡たせるところは少ない。ずっと離れた能代市の米代川河口に立ち、北方に小さく見える山並みを確認したあと、同氏の案内で真澄の足跡をたどることにした。ほどなく真っ白な白神岳(図 4)をとらえた。目指す「上文字」の雪形が現れるのか。

「白上山」が「白神山」に

嶋津さんが運転する車は、あっという間に峰浜に入った。道路がよく整備され、菅江真澄が何日もかけて、村から丘を越え谷間を下っては隣村へと歩んだ、くねくねとした道はほとんど見あたらない。しかし、所どころに真澄の足跡を今に教える案内板が目立ち、歴史を尊ぶ地元びとの気持ちに心が和んだ。

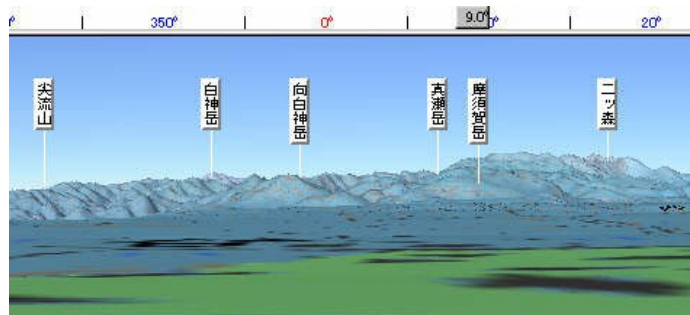


図 3 秋田県側からの白神山地。地形図データからのシミュレーション



図 4 秋田県山本郡峰浜に入ると、はるか北方に純白の白神岳(中央)が顔を現した(2002 年 4 月 2 日)

日記「おがらの滝」のルートが多くは白神山地の遠望をはばんでいたが、横内地区の北側の丘に上ると、白神岳の山頂部がひょっこりと顔を現した。真澄の日記に誤りがなかった。そこには一本の老松が樹齢を重ね、根元に天保と刻まれた庚申塚が立つ。歳月を刻んだ格好の舞台設定に思えた。

4月の白神岳は純白の衣をまとい神々しい。これから5月にかけて雪は急速に消える。尾根筋は早いですが雪深い谷間は遅い。その変わりゆく残雪の変化を目ざとく捉えながら、昔の人たちは農作業の手立てを考えていたのだろう。

この日の状況から雪形出現はまだ早く、5月上旬が勝負と見た。白神岳は遠く離れているので、いつも頂きを見せるとは限らない。地元の嶋津さんに、晴れた日の望遠撮影をお願いした。

同氏から青森の私のところに、電子メールに写真を添えて雪消えの状況を知らせてきた。山肌に白と黒の縞模様が現れ、文字とも記号ともつかないものが増えていった。そこに「上」という漢字が浮き出てくればしめたものだが。

ほかにも不安があった。それは、ごく素直な「上」の文字とは限らない。「上を表す漢字は数十ある」と、書に詳しい人から教えられ参考にすることにした。

5月3日快晴。再び峰浜の高台に立った。何という変わりようだ。残雪はほとんど消えうせ、不規則な筋状だ。撮り損じは許されない。何枚も何枚もシャッターを切った。ここは、白神岳とは直線距離にして約23キロも離れている。望遠でもファインダー内で雪の形状は分析できない。持ち帰ることにした。

はやる気持ちを抑えながら、嶋津さんの案内で手這坂という萱葺き屋根の奥ゆかしい山村(図5)を訪ねた。そこは、真澄が桃源郷と絶賛したところである。地元の人がその保存と活用をはかっている。真澄が見たのと同じように濃い色の梅の古木が咲き誇り(図6)、春爛漫の季節を迎えていた。



図5 菅江真澄が文化4年に訪れた桃源郷・手這坂
(2002年5月3日)



図6 古木の紅梅が満開

「上」の雪形発見、山名検証に成功!

いよいよ、パソコンで拡大して写真判定だ。「あった!」そこには、ごく普通に用いられ、多少変形した白い「上」の文字(図7)が浮き出ている。

真澄の日記には、さらにつぎのような添え書きがある。

「…、あるいは上文字山、また白上、あるいは白神というのも同じためしである」(図8)、と。山名は「白上」変じて「白神」になったのだ。

今、峰浜で故事来歴に詳しい年配のかたに、このような雪形のことを訊ねても知る人はいない。「白上」文字は、今の暦では4月下旬から5月上旬にかけてゆっくりとその形を整えていく。文字が完成したときはサクラが散り始めていることから、昔は田起こしの真っ盛りであったのだろう。

今回は、白神岳の山名由来について、雪形という極めて具象的な手法で検証したが、真澄は享和元年(1801)に岩崎村黒磯あたりで、「ひときわ秀でた山は白髭が嶽だという」(日記「雪の道奥雪の出羽路」)とも記している。これは雪形説に先立つ6年前のことで、「しらかみ」には土地によっていくつかのいわれがあったものと考えられる。

謝 辞

今回の調査では、秋田県側からの白神岳および白神山地の眺望が非常に難しいことから、事前に地形図データをもとに画像シミュレーションを行い正確を期したが、棟方啓爾氏にお世話になった。また、現地案内および雪消えによる白神岳の撮影フォローでは秋田県八峰町役場の嶋津宣美氏に献身的なご協力を頂いた。両氏に対して心からお礼を申し上げる。

引用文献

- | | |
|------|---------------------|
| 菅江真澄 | 1801、雪の道奥雪の出羽路。 |
| 菅江真澄 | 1807、おがらの滝。 |
| 根深 誠 | 2000、津軽白神山がたり、つり人社。 |
| 平田貞雄 | 2004、白神山地の自然、青森県。 |



図7 「上」の文字の雪形がくっきりと現れた。
下はそのイラスト(2002年5月3日)

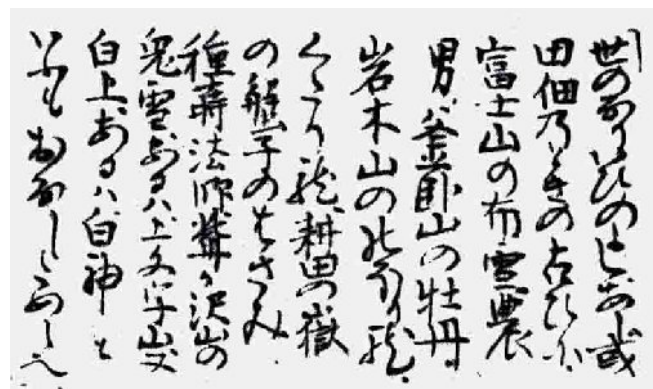


図8 日記の脚注部分に「白上」から「白神」に、とある